

岩倉使節団が海外で出会った日本人（24名）人物論

氏名	読み	生没年	出身地	使節団と出会った時の身分などの順。
90	森 有礼	もりありのり	1847 - 1889	鹿児島 駐米少弁務使
91	富田鉄之助	とみたてつのすけ	1835 - 1916	仙台 在米領事心得
92	寺島宗則	てらしまむねのり	1832 - 1893	鹿児島 駐英大弁務使
93	尾崎三良	おざきさぶろう	1842 - 1918	京都 留学生
94	吉田清成	よしだきよなり	1845 - 1891	鹿児島 海外出張中
95	中井 弘	なかいひろし	1838 - 1894	鹿児島 駐英公使館書記
96	大倉喜八郎	おおくらきはちろう	1837 - 1928	新潟 商人海外視察第一号
97	南 貞助	みなみていすけ	1847 - 1915	山口 外国銀行員
98	蜂須賀茂韶	はちすかもちあき	1846 - 1918	徳島 留学生
99	鮫島尚信	さめじまひさのぶ	1845 - 1880	鹿児島 駐欧弁務使
100	成島柳北	なるしまりゅうぼく	1837 - 1884	幕臣 海外視察中
101	西園寺公望	さいおんじきんもち	1849 - 1940	公家 留学生
102	島地黙雷	しまじもくらい	1838 - 1911	山口 海外視察中
103	前田正名	まえだまさな	1850 - 1921	鹿児島 留学生
104	大山 巖	おおやまいわお	1842 - 1916	鹿児島 海外視察中
105	青木周蔵	あおきしゅうぞう	1844 - 1914	山口 留学生
106	品川弥二郎	しながわやじろう	1843 - 1900	山口 海外視察中
107	萩原三圭	はぎはらさんけい	1840 - 1894	高知 留学生
108	河島 醇	かわしまあつし	1847 - 1911	鹿児島 留学生
109	井上省三	いのうえせいぞう	1845 - 1886	山口 留学生
110	松野 礪	まつのはざま	1847 - 1908	山口 留学生
111	橘 耕斎	たちばなこうさい	1820 - 1885	静岡 在ロシア日本語講師
112	佐野常民	さのつねたみ	1823 - 1902	佐賀 駐澳公使万博副総裁
113	川村純義	かわむらすみよし	1836 - 1904	鹿児島 海外視察中

90 森 有礼（もり ありのり）1847-1889 鹿児島 駐米少弁務使



開化派の急先鋒 後に保守化 日本語廃止論者、初代文部大臣

薩摩藩士・森喜右衛門有恕の五男として鹿児島城下で生まれる。兄・横山安武。安政7年（1860）藩校造士館で漢学を学び、林子平『海国兵談』で洋学に目醒め、元治元年（1864）より藩の洋学校・開成所に入学し、英学講義を受ける。慶応元年（1865）、五代友厚ら19名の薩摩藩英国留学生として、沢井鉄馬の変名でグラバー商会手配の英船「オースタライエン」号で密航して、ロンドン大学で学ぶ。英国では、やはり密航留学中の長州五傑と会い、倫敦薩長セミ同盟が誕生。その後、ロシアを旅行し、ローレンス・オリファントの誘いで鮫島尚信、長沢鼎ら6人でアメリカに渡り、オリファントの信奉する信仰宗教家トマス・レイク・ハリスの教団のブドウ園などで働き、次第にキリスト教に深い関心を示した。明治元年に帰国して岩倉具視に接近し、外国官権判事、公議所議長心得、制度寮副総裁心得の役職を得るが、新政府に廃刀令を唱えて物議を醸し、一時免官して鹿児島へ籠る。再び、明治3年（1870）駐米少弁務使に採用されてワシントンに赴任し、そこで岩倉使節団を迎えた。使節団に条約改正交渉を薦めるが、失敗に終る。明治6年、米国で『日本の教育』『日本の宗教的自由』『米国の生活と資源』を発刊する。同年に辞官・帰国して、福澤諭吉、西周、西村茂樹、中村正直、加藤弘之、津田真道、箕作麟祥らと明六社を結成して、『明六雑誌』で開化思想を展開した。

明治8年（1875）大久保一翁、勝海舟、福澤諭吉、渋沢栄一らの応援で私塾・商法講習所（一橋大学の前身）を開設。また福澤諭吉の証人で開拓使学校女子高第一期卒業生の広瀬常と契約書による結婚をする。一夫一婦制、良妻賢母論を唱え、二男一女を儲けるが、後に妻・常の実家の不祥事が因で離婚する。死の一年前に、岩倉具視の娘・岩倉寛子と再婚した。明治8年、駐清公使、外務大輔を経て、明治12年駐英公使。その時、憲法調査で渡欧中の伊藤博文に教育論を説き、帰国後の伊藤に呼び返されて、明治17年文部省御用掛を命じられる。明治18年（1885）、第一次伊藤内閣のもとで初代文部大臣に就任、東京高等師範学校（東京教育大学、現筑波大学）を教育の総本山として改革を行い、日本の教育政策に足跡を残す。明治19年（1886）には、学位令を發布し、大博士と博士の二等を定め、教育令に代る一連の『諸学校令』（帝国大学、師範学校、中学校、小学校）を發布し、尋常小学校を義務教育とする。次の黒田清隆内閣でも留任。明治22年（1889）2月11日の大日本帝国憲法発布式典の日に、国粹主義者の西野文太郎に斬りつけられて、翌日死去した。享年43歳。教育は国家の基本とする国体主義者で、小・中学校に軍隊式体操を導入、国語廃止論・英語の国語化を提唱したこともある。仏文学者・森有正は孫にあたる。勲一等旭日大綬章。子爵・正二位。

（2015・4・17 鹿児島県立図書館『森有礼』、『森先生伝』一木村匡、ほか）

9 1 富田鉄之助（とみた てつのすけ）1835－1916 仙台 留学生 在米領事心得



外交官、日銀二代目総裁、政治家にして実業家と多彩な人生

仙台藩の重臣富田実保の四男として仙台北下に生れる。安政3年（1856）、藩命により江戸に出て砲術を学ぶ。帰国して藩講武所の助手となるが、再び江戸に遊学して勝海舟の氷解塾に入る。慶応2年（1866）同門の高木一二郎を連れて、慶応義塾に遊学し、仙台藩士・大條清助の入塾を斡旋する。慶応3年（1867）勝の息子・小鹿のアメリカ留学に随行して渡米して、のちにお雇い外国人として日本に複式簿記を広め、商法講習所の教授にもなる W.C.ホイトニーのニューアーク商業学校で経済学を学ぶ。この間に戊辰戦争となり、仙台藩が朝敵となったので一時帰国するが、勝の薦めで再渡米し、新政府の正式留学生に認定される。岩倉使節団と米国で知遇を得て、ニューヨーク領事心得（のちに副領事）に任命され明治新政府の外交官となる。

2年後帰国して、福澤諭吉の媒酌で杉田玄白の曾孫・杉田縫（杉田玄瑞の娘）と日本で最初の契約書結婚をなす。その後、清国上海総領事に任じられるが、目賀田種太郎ら、米国留学経験者と「人力社」を創設し啓蒙運動にもあたる。後に駐英公使館書記官に任命され日本の近代化への努力を各方面に説いて回った。明治14年（1881）英国から戻ると世界経済に関する知識を買われて大蔵省に移る。翌年、日本銀行が創設されると、初代副総裁に任命されて、総裁の吉原重俊を助けるが、明治20年（1887）吉原総裁の急死で、明治21年、第二代日銀総裁となる。在任中は、公定歩合制度を確立して、その弾力的運用で、変動の激しかった経済の安定に努め、外国為替を整備し、日本銀行の中央銀行としての基礎作りに尽くした。ところが、横浜正金銀行に対する外国為替買い取り資金の供給をめぐる、大蔵大臣・松方正義と衝突し、松方の政治的圧力にも屈せず持論を改めなかったため、1年7か月後に罷免された。この経緯は『忘れられた元日銀総裁—富田鉄之助伝』（吉野俊彦）＝この真に尊敬できる人物を知り得たことは、この上ない幸せ＝に詳しい。富田は、帝国議会が始まると、貴族院勅撰議員に、東京府知事を経験、明治26年退官後は、実業家に転身、日本勧業銀行、富士紡績、横浜火災海上保険（社長）の設立に参加し、日本鉄道理事など歴任。自己の蓄財に関心なく、私財を投じ共立女子職業専門学校の設立への支援や大槻文彦らと仙台市立東華学校の創立や学資支援などを行った。『銀行小言』『李氏（リスト）経済論』の著・編著がある。《幾閱滄桑變 今朝年八旬 不飢亦不凍 聖世一閑人》（1914 漢詩）享年82歳。日清戦争や政・財・工の藩閥人事を生涯批判した。「情熱こそ学問」が信念の人。

（2015・4・18 富田文書、『忘れられた元日銀総裁』—吉野俊彦、他）

92 寺島宗則（てらしま むねのり）1832 - 1893 鹿児島 駐英大弁務使



幕末・維新を駆けめぐる優れた外交官 電信の父

薩摩の郷士・長野成宗の次男として生まれる。幼名：徳太郎、後、藤太郎。5歳の時、伯父で蘭方医の松木宗保の養嗣子となり、松木弘安（弘庵）を名乗る。長崎で蘭学を学ぶ。弘化2年（1845）、江戸に出て川本幸民より蘭学を学び、伊東玄朴の象先堂で塾頭となる。蘭方医・戸塚静海に蘭方を、古賀勤堂に儒学を学ぶ。安政2年（1855）より中津藩江戸藩邸の蘭学塾（慶応義塾の前身）に出講する。安政3年（1866）蕃書調所教授手伝となるが、薩摩藩主島津斉彬の要請で帰郷し、侍医兼御船奉行となり、藩近代化の集成館事業の一員として参画し造船、電信、ガス、写真、製鉄事業に関わる。再び、江戸に出て蕃書調所で蘭学を教えながら、英語を独学し始め、やがて本格的に学ぶ。文久2年（1862）には、英語力を買われて幕府の竹内遣欧使節団に通訳兼医師として抜擢され、福澤諭吉、箕作秋坪らと共に渡欧。翌年帰国して薩摩に戻ると、文久3年の薩英戦争に遭遇し、五代友厚と共に外国研究の為と自ら捕虜となり、イギリス政府との工作をなし以降の薩英協力関係に道をつける。慶応元年（1865）、五代友厚と薩摩藩英国留学生19名を率いて密航渡英して（変名：出水泉蔵）、英国外相クラレンドンに貿易を独占する幕府でなく各藩と直接貿易を説き、薩英友好、倒幕促進に貢献する一方で、翌年帰国すると、雄藩中心とする連合政権による国家統一国家構想を説く。

明治維新後は、寺島陶蔵（宗則）と改名する。明治元年、参与外国事務掛、神奈川県判事、神奈川県知事となり、東京・横浜間電信事業の国営化を建議している。その後、外国官判事として明治元年（1868）にはスペインとの日西修好通商条約締結に関わり、明治2年には外務大輔に。同4年のハワイ王国との日布通商条約を締結する。さらに、長崎・上海/ウラジオストック間の電信海底ケーブル敷設交渉をして、日本電信の父と言われる。明治5年、樺太千島交換条約を締結後、初代駐英日本大使として赴任する。明治6年の征韓論の政変後、参議兼外務卿となって帰国し、政府の財政難から関税自主権回復をめざして諸外国との条約交渉に臨み、アメリカとの交渉で一旦は妥結するが、イギリス・ドイツの反対に遭って挫折する。明治12年には外務卿を辞職。その後は、文部卿、元老院議長、在米日本公使、枢密顧問官、枢密院副議長など歴任する。

明治17年（1884）には伯爵に叙せられ、翌年、東京学士会院会員となる。

明治20年、62歳で、肺病の為死去。人となりは、沈着寡黙にして、外交のみならず、経済にも一見識を持つ政論家として知られる。

（2015・4・19『寺島宗則』一犬塚孝明、「岩倉使節団と寺島宗則」一山崎渾子）

93 尾崎 三良 (おざき さぶろう) 1842-1918 京都 留学生



三条実美の家人 龍馬の「新官制議定書」草案起草 国際結婚 男爵

仁和寺宮諸太夫・尾崎陸奥介（盛之）の三男として京都に生まれる。若くして両親と死別し、学問への志を持ちつつも16歳で烏丸家、のちに冷泉家に仕えた後、三条実美に見込まれて、元家人の戸田氏の養子となり、実美の家人となる。文久2年（1862）、孝明天皇の勅使となった三条実美に随従して江戸に赴き、翌3年の八月十八日の政変で三条ら過激派公卿が京都を追放され七卿落ちとなると、随行して長州に落ちのびる。慶応元年（1865）、三条と大宰府に移る。その間、撃剣・乗馬を習い、読書を積んだ。

「戸田雅楽」の別名で、三条の名代で、西郷隆盛など尊皇攘夷派との連絡役を務め、公卿の臣下や諸藩の人士との交流で攘夷論から開国論へと目覚める。慶応3年（1867）、長崎で米国領事や坂本龍馬と深交を結び、大政奉還の策を協議して岩倉具視に建策する。龍馬や陸奥宗光らと土佐や京都へ奔走し、慶喜の大政奉還の報を龍馬と同席の場で聞いている。直後、西郷隆盛らと太宰府に戻り、事態を三条実美に報告した。龍馬の「新官制議定書」は尾崎三良の起草で、総裁、議定、参与三職制の先駆をなす。

維新後、実家の尾崎氏を継ぎ、「尾崎三良」と称する。慶応4年（1868）、三条の嫡男・三条公恭の従者として、中御門寛丸、毛利元功とその従者一行8名で渡英する。

英国でオックスフォード大学聴講生として英法を習得する。ロンドンで、岩倉使節団が米国で条約交渉開始したと知り危機感を覚えて渡米、木戸孝允と岩倉に面談し、条約交渉時期尚早と献策して寺島宗則と共にロンドンに戻る。ロンドン留学中、三良は英語教師のウィリアム・ウイルソン家に同居し、その一人娘・バサイアと明治2年に結婚し、三女を儲けたが帰国時離婚した。明治6年（1873）、木戸の要請で帰国、太政官に出仕して法制整備の任に当たる。明治13年（1880）、ロシア駐在一等書記官として、公使・内務大丞を歴任。明治18年（1885）元老院議官として大日本帝国憲法の審議にあたる。明治23年（1890）の帝国議会発足と共に貴族院議員に勅選され、翌年成立の第一次松方内閣の法制局長官を務める。後に田口卯吉の帝国財政革新会の結成を支援する。明治29年男爵。明治40年には宮中顧問官。晩年には文部部省維新資料編纂委員を務める一方、泉炭鉱会社社長、房総鉄道監査役など実業界にも入り、朝鮮の京釜鉄道設立に参画し取締役も務めた。内閣制度発足時、三条の政治的復権を画策したが成らず。新聞紙条例（1875）や保安条例（1887）の起草に当たったことから酷吏の評価もある。

英国で育って16歳で来日した娘・テオドラは尾崎行雄の後妻になり、その娘に相馬雪香がいる。

（2015・4・27 『日本の近代16—日本の内と外』—伊藤隆、他）

9 4 吉田清成（よしだ きよなり）1845-1891 鹿児島 海外出張中



薩摩英国留学生、初の外債発行に成功 対米条約改定交渉に成果

弘化2年薩摩藩士・吉田源左衛門の四男として鹿児島城下に生れる。通称：己二。幼児より才気活発、学問を好んだ。藩校・開成所に入り石河確太郎から蘭学を学ぶ。慶応元年（1865）藩の英国留学生に選ばれて、永井五百助の変名でイギリスへ渡る。2年間ロンドン大学（University College of London）で航海学など学ぶ。藩の資金が尽き、オリファントの薦めで仲6人と米国へ渡り、ハリス教団に参加し、労働を中心とする信仰生活に入るが、一年程でハリスと意見が合わず、吉田、松浦弘蔵、松村淳蔵の3人は森有礼、鮫島尚信、長沢鼎を残して教団を去る。明治元年ラトガース大学に入学し、アナポリス海軍兵学校を目指す途中で断念して、翌年ウィルブラハム・アカデミーへ移り、政治経済学の勉強を始める。卒業後、ニューヨークなどで銀行保険業務の実態を学んで、明治3年12月帰国。理財能力を買われて大蔵省に出仕して、租税権頭、大蔵少輔を歴任する。明治5年（1872）秩禄処分の財源確保のため、外債募集理事官として大鳥圭介を随行に、渡米して岩倉使節団に会う。そこで駐米弁務使の森有礼と秩禄処分の是非や外債発行の可否につき論争を挑まれるが、一介の役人が政府の決定事項に嘴を挟むなど一喝して論争にけりをつける。アメリカでの外債は金利が12%と高いと見切りをつけて英国に渡り、明治6年1月英国オリエンタル銀行と1000万円、金利7%の契約に成功する。明治7年アメリカ滞在のまま駐米公使に任命される。寺島宗則外務卿のもと、条約改正交渉に臨み、明治11年（1878）吉田・エバーツ条約の調印締結に至るが、英独の反対に会い無効となってしまう。明治12年、前アメリカ大統領ユリシーズ・グラントの来日に伴い一時帰国し接待に当たったが、明治18年に外務卿井上馨と意見の衝突で、農商務大輔に転じて、そのまま初代農商務次官に任じられる。

明治20年子爵に叙せられる。同年元老院議官に転出、翌年には枢密顧問官となる。明治24年病を得て、47歳の若さで急逝した。

投機取引を抑制する「取引所条例」制定の推進役になるなど、終生、理財家としての一面を通した。生前多数の手紙・日記・記録などを遺しており、これら2700通は「吉田清成文書」として京都大学日本史研究所に保管されている。

（2015・4・28 朝日日本歴史事典、『薩摩藩英国留学生』一犬塚孝明、ほか）

95 中井 弘 (なかい ひろし) 1838-1894 鹿児島 駐英公使館書記



明治の怪傑・奇人・滑稽家・文人書家 原敬の岳父

薩摩藩城下（大久保利通旧宅に隣接）の藩士・横山休左衛門の長子として生まれ、藩校・造士館に学ぶ。祖父の代は藩の重職にあったが、父の代に没落。彼は脱藩して京都に行き浪人となる。後藤象二郎、坂本龍馬にその剛毅な性格を愛されて、二人の工面した資金で、慶応2年（1866）土佐の結城幸安と共に、イギリスへ密航留学する。1867年帰国、宇和島藩幹旋方として京都で倒幕運動に活躍。中井弘三と改名。1868年、新政府の外国事務各国公使応接掛となる。同年英公使・パークス襲撃事件では、パークスの護衛として襲撃犯の一人・朱雀操と斬り合い、自身も頭部を負傷しながらも朱雀の胸部を刺し、駆けつけた後藤に朱雀が斬られて倒れたところで、その首を刎ねた。この功績で、後藤と共に英・ビクトリア女王から宝刀を贈られている。

明治5年渡米し、その後駐英公使館書記官となり、岩倉使節団に会う。何故かパリで岩倉使節団を道案内し、何を聞いてもそつなく答えるので、怪しんだ岩倉はホテルの部屋を覗くと、ふんどし一つの裸で地図と格闘し勉強している姿があったという。逸話の多い人物で、別名：横山休之進、鮫島雲城、後藤休次郎、田中幸介、中井弘蔵と多彩。晩年は号を桜洲山人と称し書家としても名を成す。井上馨の妻の武子は中井の前妻である。

岩倉具視と大久保利通が囲碁をやっていると、碁盤をひっくり返したとか。樺山資紀を公衆の面前で面罵したとか。明治天皇の宴席で、ある人をビール瓶で殴打するとか。「大久保利通公を自分の馭者にしてみせる」と賭けをして、奸計をめぐらせて、精養軒へ到着直前で腹痛を偽って、大久保に馭者を代ってもらい見事成功するとか奇行・蛮行は枚挙に遑がない。然し、実務家としても寺島宗則と外交面で活躍し、更に明治17年滋賀県知事（1884-1890）のとき、北垣国道京都知事と琵琶湖疏水の建設に協力し、元老院議員、貴族院議員を歴任し、明治23年には錦鶏間祇候となる。

明治26年第5代京都府知事に就任し、京都三大問題に取り組む。①遷都千百年記念祭、②第四回内国博覧会③京都舞鶴間鉄道建設である。これらに精力的に推進する途次の執務中に脳溢血で倒れ、完成を見ずに57歳で亡くなるが、彼の段取り宜しきを得て次の第6代渡辺千秋知事のもとですべてが無事に完了した。

詩文・学術書にもすぐれ、『漫遊記程』『目見耳聞西洋紀行』『合衆国憲法略記』『西洋紀行航海新説』『露西亞土耳其古漫遊記程』等を多数著し、『鹿鳴館』の命名者でもある。

娘・貞子は原敬の最初の妻で、中井弘は原敬の岳父にあたる。（2015・4・29ブログ『無無明録』、『中井桜洲 明治の元勳に最も頼られた名参謀』 - 屋敷茂雄）



武器商人から大倉財閥を創設し、大倉集古館—民間初の美術館

新発田藩の商人・大倉千之助の子として生まれる。幼名：鶴吉。長じて、喜八郎。8歳で四書五経を、12歳から私塾積善堂で漢籍・習字を学び、陽明学の知行合一の行動主義的規範を身につける。嘉永4年（1854）、江戸に出て、日本橋の狂歌師檜園梅明に入門。狂歌仲間の和風亭国吉の塩物商いを手伝い、中川鯉節店で丁稚見習い奉公をしたのち、安政4年（1857）にそれまで貯めた100両を元手に独立して、乾物商大倉屋を開業する。然し、横浜で黒船を見たことを契機に乾物屋を廃業し、慶応2年（1866）鉄砲店で見習い修業して翌年独立、鉄砲店大倉屋を開業する代わり身の早さを見せる。資金がないため、外注を受けてから横浜居留地で買い付ける。製品の良さと納入の早さで信用を得て、やがて官軍・新政府御用達の鉄砲商となって、上野戦争、戊辰戦争、台湾出兵、西南戦争、日清・日露戦争などの一連の武器調達に活躍・蓄財する。

明治5年7月、民間人として初の欧米経済事情視察の旅に出て、米、仏、英、伊やウィーンなど歴訪。英国グラスゴー倶楽部で演説し「これからの日本は居貿易（居留地貿易）から、出貿易（海外進出）」と啖呵を切る。ロンドンで岩倉使節団に会い、大久保や木戸に軍服には羅紗がよいと説く。ウィーン万博では木戸に会い、ローマまで同行し、使節団とも再合流している。帰国後はすぐに大倉組商會を設立し、ロンドン支店、釜山支店などを開く。洋行前の明治4年にも新橋駅建設の一部を請負い、高島嘉右衛門らと横浜水道会社設立し、建設工事に着手。貿易商社を横浜や日本橋に開き海外貿易の端緒を築いた。明治10年、東京商法會議所（現、東京商工会議所）、横浜洋銀取引所（横浜株式取引所）など新規事業に関与。明治14年鹿鳴館建設工事、大阪紡績会社設立。明治15年日本初の電力会社（東京電燈）を矢島作郎、蜂須賀茂韶と共に設立。明治20年に日本土木会社、内外用達会社、帝国ホテルなど設立。東京瓦斯、京都織物会社、日本製茶、東京水道会社にも関与して大倉財閥の基礎を固めていく。日本初の私鉄・東京馬車鉄道を始め、九州、北陸、成田鉄道や国外の台湾、京釜、金城、京仁などの鉄道事業にも出資・参加し、教育機関でも韓国善隣商業高等学校、大阪大倉商業学校などを創設した。大日本麦酒株式会社、日清豆粕製造（現日清オイリオ）、日本皮革（現ニッピ）、日本化学工業、帝国製麻（現帝国繊維）、東海紙料（現東海パルプ）など設立。大正7年には大倉商事株式会社となりコンツェルン化を完成した。美術収集品で、日本初の私立美術館大倉集古館を開設。狂歌名：大倉鶴彦。一中節芸名：都一鶴。60歳で書道の手習い。90歳で南アルプス赤石岳登山するなど、公私共々人生を満喫した人。（2015・5・6 岩倉使節団—誇り高き男たちの物語、大倉喜八郎年譜2010年）

97 南 貞介 (みなみ ていすけ) 1849 - 1915 山口 外国銀行員



国際結婚第一号 岩倉使節団の外貨を預かるも銀行が破産

生れ年に若干の疑問がある。高杉晋作の従兄弟で、井上馨が英国密航の前に、自分たちに代り南貞介3人を、兵学修行と時状探索の為に横浜に行かせたとの記録がある。

高杉晋作が萩藩の近代化の為に、幕末英国に密航留学させた。ロンドンではオールコックの秘書の、日本で攘夷派の襲撃を受け負傷して帰国していたローレンス・オリファントの斡旋で海軍学校に学ぶ。慶応3年に一旦帰国。明治3年東伏見嘉彰親王の英国留学に随行する。年給3000ドル契約と言われる。ロンドンでは、木戸の薦めもあったようで、リンコンスイン法律学校で学ぶ傍ら、渡英して知り合ったボールズ銀行頭とアメリカ・ジョイント・ナショナル銀行の代理店・ナショナル・エイジェンシを設立その頭取となる。岩倉使節団の派遣を聞いてアメリカに渡り、現金を持ち運ぶより、銀行に預ける方が安全と説いて預金獲得を狙うが使節団の公金(50万ドル)を預かる田中光頭は頑として拒否。やっと既知の木戸や大久保、久米など団員の私費25,000ドルの預金を獲得するが、使節団がロンドンにいた時、その銀行の火災が遠因での銀行倒産に遭い預けた団員は散々な被害を受ける。

南は使節団の滞在中(明治5年)、すでに英国人のライザ・ピットマンと同居・結婚しており、明6年24歳の時に、「内外人民婚姻条規」の太政官布告が出されたことで、政府公認国際結婚第一号となる。明治6年、大蔵省出仕名目派出生徒と発令されている。木戸、伊藤らの配慮で政府留学生となって帰国したようだ。ライザと同伴帰国して、私塾・南英学舎を経営し、ライザにも教師を勤めさせたが、二人の仲は醒めて十年後に離婚した。明治14年—18年、東京府一等属・准奏任御用掛で、小笠原島出張所長。

明治18年(1885)香港領事として赴任、翌年フィリピン視察訪問を訪れている。明治21年10月14日の伊藤博文から井上馨宛書簡の中に「南貞介 農商務省登用好都合」の記述があり、翌年、井上馨農商務大臣の下で、農商務次長となって各国取引所調査で海外派遣されている。明治26年に設立された伊藤博文発案の『喜賓会』(Welcome Society)の設立は、農商務省商工局長だった南貞介が、渋沢栄一、益田孝の協力を得て、井上馨外務大臣の賛同で実現。宮内庁からの下賜金と会費、寄付で運営し外国人の歓迎などに使われた組織で会場は帝国ホテルが使われ(1902年からは商工会議所で)初代会長は、フランス大使、文部大臣経験の蜂須賀茂韶侯爵。幹事は渋沢栄一、益田孝であった。この会は1912年(大正元年)まで続いた。明治36年、『The Excursion Journal』(漫遊新誌)を刊行。大正4年に南は亡くなった。伊藤博文、井上馨が終生面倒を見たようだ。(2015・5・6『南貞助と妻ライザ』—手塚竜麿、自伝)

98 蜂須賀茂韶（はちすか もちあき）1846 - 1918 徳島 留学生



将軍徳川家斉の孫 駐仏公使 北海道で農場経営

第13代藩主・蜂須賀斉裕（第11代将軍・徳川家斉の22男）の次男。幼名：氏太郎。後に従兄弟で14代将軍・徳川家茂の偏諱を賜り、茂韶と名乗る。慶応4年（1868）鳥羽・伏見の戦いの最中に父の死に遭い、家督を継ぐ。その混乱もあり、戊辰戦争では徳島藩は十分な活躍が出来ずに、諸藩からの批判も浴びる。将軍家に近すぎたので、身動きが難しかったともいえよう。明治になって、議定、刑法官事務局輔、左近衛権中将、権中納言、民部官知事、徳島藩知事と目まぐるしく役職が替わり、明治4年の廃藩置県には率先して版籍奉還に応ず。明治5年には、岩倉使節団を追うように、小室信夫らを伴い渡英し、ロンドンで使節団に会う。オックスフォード大学に留学し、7年後の明治12年（1879）大学卒業帰国して、外務省御用掛に任官する。翌年、大蔵省関税局長（三等出仕）。明治15年参事院議官、勲三等となり、法制部勤務後、同年12月に駐フランス特命全権公使として赴任する。スペイン、ベルギー、スイス、ポルトガル公使も兼務。在任中侯爵を授爵し、明治19年帰国する。明治20年元老院議官（勅任官一等）を任官。その後も、第11代東京府知事兼東京市長（1890 - 1891）、第2代貴族院議長（1891 - 1896）、第二次松方正義内閣の文部大臣、枢密顧問官を歴任する。麿香間祇侯待遇。

明治22年には三条実美らと共に、資産活用の一環として北海道雨龍に原野1億5000万坪を買い受けて『華族組合雨龍農場』を立ち上げて農園経営に乗り出すが、三条の死で一旦解散して、次いで『蜂須賀農場』を開く。この農場は大正期までに900戸が移住して三代続き、後に『御農場』とも呼ばれた。昭和22年の農地解放で解散することになる。

その他にも、実業家として、東京電燈や日本鉄道に参画、留学帰りの明治12年には、東京海上保険会社を設立し、筆頭株主（12・5%）として頭取を引き受けている。この会社には株主として、岩崎弥太郎、渋沢栄一、安田善次郎、大倉喜八郎ら200名が株主に名を連ねている。日本地理学会会長など学術振興にも努めている。

趣味人でもあり、俳句、能、舞を能くし、号は双樹庵霰笠と称した。長男の蜂須賀正韶もケンブリッジ大学に留学し茂韶、徳川慶喜の四女・筆子と結婚。貴族院副議長など務めている。夫人同伴での海外旅行・第一号。

（2015・5・7）

99 鮫島尚信（さめじま ひさのぶ）1845 - 1880 鹿児島 駐欧弁務使



日本外交官第一号 欧州での日本外交の確立に尽くして客死

鹿児島城下の薩摩藩医・鮫島淳愿の子として生まれる。15歳で蘭学を学び、文久元年（1861）に藩命で蘭医研究生として長崎に学び、医学の他、瓜生寅が主宰の英学塾培社で英語を学ぶ。元治元年（1864）に設立された藩立洋学校「開成所」で訓導を務める。この時長崎培社の実質的な運営者の前島密を英語教師に招いている。慶応元年（1865）薩摩藩の留学生として、五代友厚や森有礼ら15名の留学生として渡英して、ロンドン大学法文学部で約一年間学ぶ。慶応3年（1867）森有礼、長沢鼎、吉田清成、畠山義成、松村淳蔵ら6名で渡米し、トマス・レイク・ハリスの結社に入りブドウ園などで働くが、王政復古を聞き、ハリスに日本で働くことを薦められ森と共に帰国する。明治元年10月徴士・外国官権判事に任官し、その後東京府判事、東京府権大参事、東京府大参事を経て、明治3年外務大丞、欧州差遣、小弁務使を経て明治4年ロンドンに着任する。明治5年、中弁務使となりパリに着任して、弁理公使、特命全権公使に昇進し、英独も兼務した。然し、当初は特に英国で青二才扱いされたようで日本政府から、英独仏に対し、第四等外交官と遇するよう要請している。パリで、後に共著で『外国交法案内』（Diplomatic Guide）を出すことになる英国人秘書フレデリック・マーシャルを雇い、情報収集、人間関係の構築、外交実務の研究などで外交を国際水準に引き上げる努力をした。岩倉使節団が欧州各国を順調に回覧できたのも、鮫島の予めの便宜供与や調査協力への外交努力と各国の外交慣習や儀礼の研究に負うところが大きい。その他にも、留学生の調査監督指導、在留日本人、渡航者たちへの世話や、お雇い外国人との契約などでも活躍した。20年間日本で近代諸法典の指導に当たったボアソナードや4年間日本で法律顧問・法学教師を務め、日本への近代法移植に貢献したジョルジュ・イレール・ブスケを契約・招致したのも鮫島である。明治6年、国際東洋学会議を主宰して挨拶「今日は欧州に於いて、西洋諸国に日本が同じ共同体として初めて認められた日です。政治、経済の絆に加え、教育・知的絆を築く嚆矢です」の趣旨を述べた。

明治7年（1874）帰国して、外務省次官の外務大輔に昇進するが、寺島宗則外務卿に請われて、明治11年妻サダを帯同して再び駐仏特命全権公使として赴任し、パリ万博の監督や万国郵便連合条約に調印して国際郵便の日本での主権を回復した。その頃から肺病をやみ、ドイツ・バーデンでの療養などを繰り返していたが、スペイン・ポルトガルの公使も兼任となった明治13年（1880）に当時駐英公使だった盟友の森有礼に看取られながら35歳で亡くなった。モンパルナス墓地に眠る。（2015・5・9 小野『明治外交物語』犬塚孝明一吉川弘文館、ブログ・気持玉、幕末から学ぶ一山口昌之）



将軍の侍講から 歩兵頭 外国奉行そして風流、風狂人へ

奥儒者・成島稼堂の子として浅草御厩河畔の自邸で生まれる。幼名：甲子麿。甲子太郎。惟弘。弘へと変わる。号は柳北。安政元年（1854）18歳で奥儒者見習となり、14代将軍家茂の近侍となる。同年父の死で、家督を継ぎ、第8代奥儒者となる。成島家は19世紀前半から『徳川実紀』『続徳川実記』『後鑑』などの編纂を続けており、柳北も長じてこれに従った。20歳から家茂に『大学』など侍講するが、建策が採用されないため狂歌で批判して3年間解職される。奥儒者は政治に口を出さないしきたりだった。

3日ごとの侍講の傍ら、旗本永井主膳の娘と結婚していたが、その傍らよく吉原に遊び、それをもとに安政6年（1859）23歳で『柳橋新誌』を執筆。

慶応元年（1865）フランス騎兵伝習を建言して、横浜兵営築造掛、騎兵頭並を拝命する。翌年、フランス式練兵指導者のシャノアンと親交を結ぶ。慶応4年には騎兵頭、外国奉行（3000石、従五位下、大隅守）、会計副総裁など歴任して幕末を迎える。

明治維新後は、平民籍で向島須崎村に隠棲するが、明治5年、浅草東本願寺学塾の学長をしていた関係で、法主現如上人・大谷光瑩の欧州宗教事情視察随員と欧米の旅に出る。この旅行のことを洋学の師・箕作秋坪以外に家族・友人・知人にも内緒で出発し、外国から手紙を出すまで皆を心配させている。

マルセイユまでの同船には姉小路公義や留学生3名と岩倉使節団後発司法調査団一行8名と東本願寺一行5名の計17名と賑やかであった。パリに着くと、岩倉使節団とも合流して、一緒に諸施設の見学などする一方、連日のようにパリ在住の日本人と会っては情報交換をしている。その数なんと60余人。その他にも、劇場、カフェ、レストラン、見世物、サーカス、キャバレーや遊郭などもよく訪れている。

帰国後、木戸より文部卿への就任を要請されたが受けず。安田善次郎と共に、日本最初の生命保険会社「共済五百名社」を設立する。明治7年に『朝野新聞』を創刊して初代社長に就任。言論取締法の「讒謗律」や「新聞紙条例」を井上毅、尾崎三良を名指しで誹謗し、禁獄4ヶ月、科料100円を受ける。社論は大隈重信に近く、立憲改進黨に入党、大隈の設立した東京専門学校（現慶応義塾大学）の初代議員（理事）にも就任している。又、文芸雑誌『花月新誌』を創刊し文芸界でも活躍。商法会議所（現商工会議所）の設立、隅田川河畔桜植樹にも尽力した。グラント前大統領接遇委員も務めたが、明治17年病で48歳の生涯を閉じる。漢詩人、随筆家、風刺に富んだ文章で名声を博し、著書は多数ある。

（2015・5・11 『航西日乗』 ほか）

101 西園寺公望（さいおんじ きんもち）1849 - 1940 公家 留学生



最後の元老 明治・大正・昭和の政界を駆け抜ける 国際協調派

清華家の徳大寺公純の次男として京都に生まれる。嘉永五年（1852）西園寺師季の養子となる。徳大寺家も西園寺家も共に、藤原北家閑院流系の同属。

慶応3年（1868）官軍参与、明治元年の戊辰戦争では、山陰道鎮撫総督、東山道第二軍総得、北国鎮撫使などを務める。明治2年私塾立命館を創設するが、明治3年政府の干渉で閉鎖に追い込まれる。同年大村益次郎の推薦で官費フランス留学生（年間1400ドル）として渡仏、ソルボンヌ大学に学ぶ。岩倉使節団とは、このパリで会っている。パリ・コンミュンにも遭遇している。ソルボンヌ大では政治学のエミール・アコラスに学び、政治家への道を薦められる。後に、フランス首相となるクレマンソーや、中江兆民、松田正久、光妙寺三郎（長州藩費仏留学生）らと親交を結ぶ。明治13年（1880）帰国した翌年にフランスで知り合った中江、松田、光妙寺等と『東洋自由新聞』を創刊し社長・主筆となる。明治15年の伊藤博文の憲法調査に随行して渡欧し、以降伊藤の腹心として政界に重きをなす。第二次伊藤内閣にて文部大臣として初入閣し、外務大臣も兼任する。第三次伊藤内閣でも文部大臣を務め、第四次伊藤内閣では班列として入閣し、伊藤博文が病氣療養中は内閣総理大臣臨時代理となり、のちに伊藤が単独辞任すると内閣総理大臣臨時兼任を務める。その後、伊藤の立憲政友会の総裁に就任して、明治39年（1906）内閣総理大臣に任じられ、第一次西園寺内閣、第二次西園寺内閣を組閣した。この時代、西園寺と桂太郎が交互に政権を担当したことから「桂園時代」と称された。その後は、首相選定に参画するようになり、大正5年（1916）に正式な元老となる。大正13年に松方正義が死去した後は「最後の元老」として大正天皇、昭和天皇を輔弼し、実質的な首相選定者として政界に大きな影響を与えた。

政治家として西園寺は聡明で国際的視野を持ち、学識が深く、文化的にも洗練された人物であるとの評価が大勢である。また民主主義の潮流は支持したが、大衆の熱狂には批判的であった。親欧米的で、軍部などからは国家主義に反する「世界主義者」と見做されていた。宮中・財界などの姻戚関係を背景に、元老として宮中と国務、軍部の調停役をつとめ日本の政治をリードし続けた。明白な国際協調派で「東洋の盟主たる日本」という狭い気持ちでなく「世界の日本」に着目した。又、天皇の親政には反対し続けた。

教育では、勅語の『忠孝』『愛国』のない、「第二次教育勅語」の改定に挑み、女子を含め日本臣民が列国国民と対等に対応できるのを目標にしたが、伊藤の反対で実現せず。

京都帝国大学（明治27年）、明治法律学校（明治大学の前身）、日本女子大学創設に協力した。生涯正式結婚せず、4人の内妻を持った。学芸を愛し、文化サロン『雨声会』では、鷗外、露伴、藤村、独歩らと交遊した。（2015・5・13）

102 島地黙雷（しまじ もくらい）1838 - 1911 山口 海外視察中



明治政府に政教分離を説き実現させた僧侶 仏教史上『黙雷時代』現出

周防（山口）の専照寺住職・清水円随の四男として生まれる。号：雨田、北峰、六六道人。慶応2年（1866）、同郡島地村の妙誓寺の住職となり、島地と改姓する。

島地黙雷、大洲鉄然、赤松連城は西本願寺維新三傑と称される。3人は萩で改正局を開いて、末寺の真宗僧徒の教育に尽くしていたが、明治政府の神仏習合・廃仏毀釈の政策に危機感を強め、明治元年京都に出て、坊官制の廃止、末寺からの人材登用などの本山制度の改革を西本願寺に建議し、明治3年に西本願寺の参政となった。

最初、岩倉使節団と同行を、木戸孝允に働きかけていたが、引率役の大谷光尊（明如、1850 - 1903）が、父広如（1798 - 1871）の死去で法主の座を継ぐことになり、急遽外遊残念し、改めて明治5年3月に、黙雷を団長に梅上沢融（1835 - 1907）、赤松連城（1841 - 1919）、堀川教阿（生没年不詳）－英国留学と光田為然（1848 - 1875）ドイツ留学の5名で香港からヨーロッパ向け出発した。岩倉使節団左院グループと同船だった。パリで、岩倉使節団や東本願寺の現如一行と出会っている。黙雷はフランス、イギリス、ドイツ、スイス、イタリア、ギリシャ、パレスチナ（キリスト生誕地）、印度を旅行して、1年4か月後の1873年7月帰国し、『航西日策』『欧米各国宗教略列』『欧州盛況見聞』に記録を残している。梅上はパリからアメリカに渡り、黙雷は福地源一郎とオスマン・トルコとイタリア視察に同行している。

明治5年旅先から明治新政府に対し「三条教則批判建白書」を送付している。そして、神道は宗教ではない。神道は朝廷の治教であって、皇室の神道こそが、惟神（かんながら）の道である。神道には、①皇室の神道、②水戸学・本居、平田学の神道、③民間の神道（村の鎮守やお稲荷さん）があると説く一方で、帰国後『大教院分断建白書』で政教分離、信教の自由、神道の下にあった仏教の再生、大教院の廃止を主張し実現させた。

萩は毛利輝元の時代から石山本願寺と関係が深く、西本願寺派は倒幕運動の資金源でもあり、井上馨、久坂玄瑞、桂小次郎、山田顕義、平田東助、品川弥二郎なども恩恵を被っている。方や東本願寺（大谷派）は江戸時代から徳川家に近い関係だった。

明治21年（1888）黙雷は雑誌『日本人』の発行・政教会の同人となる。

明治25年（1892）56歳で盛岡市北山願教寺第25世住職となり、明治38年、奥羽開教総監の役職で隠退し、養嗣子の島地大等に第26世を譲った。

明治4年から明治19年を仏教史上『黙雷の時代』と呼ぶ。女子学芸学舎（現・千代田女学園）を創設。日本赤十字社創設にも関与。著書に『仏教各宗要綱』『維摩経講義』『三国仏教略史』等多数。（2015・5・15）

103 前田正名（まえだ まさな）1850 - 1921 鹿児島 留学生



『布衣の農相』の名で全国行脚、殖産興業政策立案・実践

薩摩の貧しい漢方医・前田善助の六男として生まれる。14歳で薩摩藩洋学・開成所で蘭学・英語・西洋兵学を学び、16歳で長崎に藩費留学して、何礼之の語学塾に学ぶ。そこで逢った坂本龍馬に最も文明の進んだ国はフランスと聞いて、仏留学の志を立てて、明治元年15歳上の兄・前田献吉と高橋新吉と共に『和訳英字書』（薩摩辞書）を上海で印刷して資金を得た上、内務省勸業局に出仕。大久保利通、大隈重信の計らいで明治2年、駐日仏代理公使・モンブラン伯爵に随行してパリに国費留学する。モンブランはパリ万博で薩摩を独立国と紹介したほど薩摩鼻根の人。パリではモンブラン家に寄宿し秘書を兼ねながら日本公使館に常勤した。明治3年普仏戦争では、村民兵として革命軍に加わり戦った。勸業寮御用掛を兼ねて公使館勤務9年、うち二回帰国して内務卿・大久保に「少数の資本家の大工場の育成より、農業を基盤とした生産加工や貿易を促進するほうが日本は豊かになる」と説く。明治10年西南戦争の最中に帰国、ブドウの種苗を大量に土産にする。翌年、三田育種場を開設。大久保にパリ万博参加を進言して博覧会事務長を務める。大久保暗殺後は、大久保家に逗留して、三人の子息の面倒を見ていた大久保の姪の石原イチと大隈を親代わり、松方正義の媒酌で結婚。大久保の殖産興業を継承し、津田仙らと近代農業の基礎作りを始める。明治12年『直接貿易意見一斑』を起草し、①中央銀行の設立、②貿易会社の設立、③産業カルテルの設立を提唱する。明治14年、大蔵省・農商務省の大書記官になって理事官に進む。在職中、全国行脚して国内産業の実情を調査し、殖産興業の為の『興業意見』を纏めて、明治17年に松方に提出するも入れられず。翌年官界を退いて、払下げの土地で、「播州ブドウ園」「神戸オリーブ園」を、鹿児島、宮崎、大分、福島などに「一步園」などの適地適作の農園を展開したが、事業手腕はなかったようで開田事業や製紙事業、ペルー銀山開発などで失敗を重ねた。明治21年（1888）、第七代山梨県知事に赴任し、殖産興業、河川改修、甲州ブドウの普及に努めた。赴任時、蓑笠姿で登庁したので、「蓑笠知事」の異名を取った。明治22年農商務省農務局長と東京農林学校長を兼務し、明治23年農商務次官となるが、興業銀行条例草案を巡って、農商務相の陸奥宗光と対立して下野する。あと、元老院議員、貴族院議員を歴任。明治33年北海道・釧路市天寧で最初のパルプ・メーカー前田製紙合資会社を設立。明治39年、北海道国有未開処分法による阿寒湖畔の土地3800ヘクタールを取得、居を構え、農業、牧場を考えたが、景観美に打たれ観光資源と考える。「前田家の財産はすべて公共事業の財産とす」と家憲を残して他界する。。（2015・5・16 ブログ「国際ワインの推進者・前田正名」他）



西郷の再来と言われた男 日露戦争で見せた存在感 山川捨松と再婚

薩摩藩士・砲術家大山綱昌（彦八）の次男として生まれる。西郷隆盛・従道の従兄弟にあたる。幼名：岩次郎。通称・弥助。雅号：赫山、瑞岩。字：清海。6歳、郷中教育で隆盛に読み書きと、薩摩武士の神髄・卑怯を嫌い、死を覚悟して事に臨む清さを学ぶ。軍記物『真田三代記』『三国志』『太閤記』『呉越軍談』等好んで読む。有馬新七などの影響で一時、尊皇過激に属して寺田屋事件にからみ謹慎処分となるが、薩英戦争で謹慎を解かれ、弁天波戸砲台に配属される。ここで西洋列強の軍事力に衝撃を受け、藩命で、黒田清隆らと共に江川英龍の塾に入り砲術を学ぶ。1866年小松帯刀の命で、京都事情を伝えに、長州藩と大宰府の三条実美へ派遣される。戊辰戦争では新式銃隊を率いて、鳥羽伏見の戦い、会津戦争など各地を転戦。会津では、内股に被曝、負傷して後送される。この時、会津鶴ヶ城では山本八重や後に後妻となる山川捨松らが籠城奮戦していた。1868年鹿児島に帰り、砲隊塾を開き、欧米銃を改造して『弥助銃』を考案する。

明治3年(1870)8月、兵部省より普仏戦争と軍事視察を兼ねて品川弥二郎らと共に、米国経由渡欧し、明治4年3月帰国し、再び明治4年11月にジュネーブ留学に出掛けている。この間に、岩倉使節団に会っている。ウィーン万博には1ヶ月間に26回通って、近代文明の吸収に努めている。；吉井友美から西郷隆盛下野の知らせを受けて帰国し、鹿児島で西郷復帰の説得にあたるが、逆に「東京に帰れ」と諭し戻される。その西郷と西南戦争では、大山は政府軍の攻城砲隊司令官として、城山に立て籠もる西郷軍と対峙する羽目に陥る。大山は、生涯、その後鹿児島の土を踏まなかったと言われる。

明治11年、明治天皇の北陸・東海巡幸に付き添いを命じられ、天皇から「西郷の身代わり」と思うと言われる。明治天皇も西郷が大好きだったのだ。

日清戦争では陸軍大将・第二司令官として、日露戦争では元帥陸軍大将・満州軍総司令官として、共に日本の勝利に貢献して、同郷の東郷平八郎と並び称され、「陸の大山、海の東郷」と言われたが、この頃には、片目が失明していたと言われる。兵士には、「敵国人と雖も、愛をもって接すべし」と訓示していた。スイス留学中にロシア革命家レフ・メーチニコフと知り合い、東京外国語学校に招聘したこともあり、戦争と個人とは切り離して考えた人だろう。日露戦争後は、那須の別邸で、農作業などに打ち込み、悠々自適の生活に入る。総理大臣への薦めも固辞し、政治的野心からは無縁の男。愛妻家で、家族との時間を大事にし、私心なく、海のような広い心を持ち、誰にも謙虚で西郷の再来とようと言われた。マッカーサー元帥も大山ファンで、自室に肖像画を飾っていた。

(2015・5・20 国際留学生協会HP, 他)

105 青木周蔵（あおき しゅうぞう）1844 - 1,914 山口 留学生



滞独 25 年のドイツ通の第一人者 条約改正交渉に尽力

長州藩村医・三浦玄明の長男に生まれる。幼名：團七。22 歳、毛利敬親の侍医で日本で初の種痘を行った蘭学医・青木周弼の弟・青木研蔵の養子となり士族となる。二人の名前を取り周蔵と改名。研蔵の娘・テルと結婚する。藩校・明倫館で学ぶ。長崎で医学修行をする内、ドイツ医学を知り、明治元年、藩留学生としてドイツ留学。渡独後、医学からこれからは政治・経済と無断転科して問題になるが、来独中の山縣有朋の決済で解決する。1872 年、北ドイツ留学生（100 名）の総代となり、在独留学生の専攻科目の決定に介入して、軍事・医学以外の林業、製紙、ビール、製絨毯への転身を勝手に進める。日本近代化には、専攻分野の分散が必要と考えたようだ。明治 6 年帰国して、外務省入省。翌明治 7 年、駐独代理公使、駐独公使、オーストリア・ハンガリー公使兼務。1876 年にプロイセン貴族の令嬢エリザベートと恋におち結婚を決意するが、日本の妻テルは離婚を了解せず、新しい夫を見つけ結納金持ち条件で、品川弥二郎の斡旋で解決する。明治 12 年、エリザベートを伴い帰国、条約改正取調掛となるが、翌年、井上馨外務卿のもとで、再度駐独公使で赴任し、明治 15 年（1882）伊藤博文の憲法調査を助け、ベルリン大のグナイスト、ウィーン大のシュタイン両教授への斡旋をする。明治 19 年、オランダ、ノルウエー公使も兼任し、翌年帰国し、条約改正議会副委員長となる。明治 19 年、第一次伊藤内閣の井上馨外相のもと外務次官として、条約改正全権委員を務め、続いて日本帝国憲法発布後の、第一次山縣内閣、第一次松方内閣の外相として、条約改正交渉に奮闘して、新条約調印寸前まで漕ぎつけたが、大津事件が発生して引責辞任に追い込まれた。明治 25 年（1892）三度目の駐独公使として赴任、駐英公使を兼任し、陸奥宗光外務大臣と共に条約改正に尽くし、明治 27 年、遂にアレクサンダー・フォン・シーボルトの通訳で日英通商航海条約改正に成功した。その後、第二次山縣内閣でも外務大臣を務め、明治 33 年（1900）枢密顧問官、子爵を授爵。明治 39 年の駐米大使を最後に政界から引退した。晩年は、那須塩原の青木邸（松ヶ崎萬長設計、1888）を拠点に農業開拓に尽くした。ドイツ滞在 25 年、ドイツ文化・政治体制の導入を図り、ドイツ人のような日本人と呼ばれた。エリザベートとの間に生れた娘・ハナ、その娘ヒサと繋がり、今もドイツに子孫が健在だ。

（2015・5・21）



「トコトンヤレ節」作詞者 幕末の志士から枢密顧問官へ

長州藩足軽・品川弥市右衛門の長男として生まれる。松下村塾に入門し、吉田松陰に学ぶ。通称：省吾。弥吉。弥二郎。変名：橋本八郎。松本清熊。雅号：扇洲。苦談楼。念仏庵主。苞子。春狂。五明州。花月楼。露山荘主人。尊攘堂主人。吉田松陰評は「温厚正直で人情厚く、うわべを飾らない。ぬきんでた能力はないが、心が広く奥深いのが優れている」安政6年（1859）、安政の大獄で松陰が獄死すると、高杉晋作らと行動を共にして尊王攘夷運動に奔走し、寺田屋事件や英国公使館焼き討ちなどに参画し、元治元年（1864）の禁門の変では八幡隊長として参戦苞し、のちに太田市之進、山田顕義らと御楯隊を組織する。慶応元年（1865）、木戸孝允と共に上京して情報収集と連絡係として薩長同盟の成立に尽力する。同盟後、人質として薩摩藩邸に留まる。慶応三年、大久保一蔵と岩倉具視に会い、錦旗調製を託される。戊辰戦争では奥羽鎮撫総督参謀、整武隊参謀として活躍する。戊辰戦争の折、新政府軍が歌った「トコトンヤレ節」（宮さん、宮さん）は品川の作詞と言われる。

明治3年普仏戦争視察の為、大山巖と同行して渡欧。仏独英に留学滞在する。農政や協同組合など調査し、駐独公使館にも勤務した。明治9年帰朝し、京都に尊攘堂を設立し、吉田松陰の遺稿の出版や、維新で亡くなった志士たちを顕彰した。同年、内務省で内務大書記官、内務少輔となる。萩の乱と翌年の西南戦争の鎮圧に尽力。明治14年、農商務省で農商務大輔として殖産興業に努める。明治15年、協同運輸会社設立を援助したが、過当競争で失敗。

明治17年維新の功で子爵となり、同18年駐独日本公使として赴任。同20年帰国後、宮内省御料局兼官中顧問官となり、皇室財産を確立する。明治24年（1891）には第一次松方内閣の内務大臣に就任するが、次官の白根専一と共に警察を導入して強力な選挙干渉を行って、死者25人、負傷者388名を出したことを非難されて、引責辞任に追い込まれる。枢密顧問官に任ぜられるが、同年退官し、西郷従道と協力して政治団体・国民協会を組織し副会長となる。明治32年、再度、枢密顧問官に復帰するが、翌年に肺炎のため東京で病死、享年58歳。九段坂公園に銅像がある。

又、ドイツ学協会学校（現・独逸学園）や旧制京華中学校（現・京華学園）を創設し、信用組合や産業組合の設立にも貢献している。大日本山林会初代幹事長、大日本水産会・第一次幹事長（明治15年—19年）も務めている。妻の静子は山縣有朋の姉・山縣寿子の長女である。明治18年（1885）那須塩原に別荘・念仏庵を建てる。

（2015・5・22 京大付属図書館・維新資料など）

107 萩原三圭（はぎはら さんけい）1840 - 1894 高知 留学生



ドイツ初の留学医学生 医学博士取得 明治天皇内親王の御典医

土佐藩町医者：萩原静安（復斎）の嫡男として生まれる。諱：守教・慮庵・象堂。
天保11年11月11日の生年月日から「十一＝土」三圭と洒落て雅号とする。

父・静安は種痘を広めて認められ、ご用人格として藩医となる。三圭は、高知城下で細川潤次郎に蘭学を学び、安政6年（1859）、大阪の適塾で緒方洪庵に蘭学・医学を学んで、塾頭・長与専斎と厚誼を結ぶ。慶応元年（1865）長崎に出て精得館（長崎養生所の後身）で、オランダ人医師のマンズフェルトやボードウィンについて西洋医学を修めた。戊辰戦争の最中、慶応4年に、三圭はプロシアで医学伝習の為、青木周蔵と共に長崎からパリに渡り、3か月後ドイツで出て日本人で初めてベルリン大学へ留学した。

明治6年（1873）7月、岩倉使節団と会って、文部理事官・田中不二麿随行の長与専斎に再会し、医学東校の解剖学教授として招聘されて、ドイツ人解剖学者のヴィルヘルム・デーニッツを伴って帰国、文部省出仕の身分で、医学校に奉職し、東京医学校教授（東京大学医学部の前身）に任ぜられたが、1年で退職した。

明治8年（1875）、京都療病院に奉職した。この学校は、明治5年から京都府の参事・植村正直、顧問・山本覚馬、蘭方医・明石博高らと京都諸寺の僧侶らが団結し出資を募り創設した。ドイツ人医師・ヨンケル、オランダ人医師・マンズヘルト、ドイツ人医師・ショイベ等によって育成された病院で京都西洋医学導入の先駆けであった。

三圭は明治12年（1879）、病院附属医学校（京都府立医科大学の前身）の創設にあたり。その校長となった。

明治14年同校を辞し、翌年東京に戻り、旧土佐藩主の山内豊範侯爵の主治医となる。この時、豊範の子・山内豊景が病を得て、他の医者に見せても治療できず生命の危機に瀕していたが、三圭により快復を果たした。そのお礼にと、豊範は報酬を申し出たが、三圭はそれを固辞しその代わりに、もう少し学問を究めたいと再留学を許された。

明治17年（1884）、三圭は再びドイツ留学に出る。今回は、森林太郎（森鷗外）、長与称吉（長与専斎の長男）、片山国嘉、丹波敬三、田中正平、宮崎道三郎、隈川宗雄、穂積八束、飯盛挺造らと10名であった。のちに鷗外は10名を題材に『日東十客歌』を書いている。三圭は森、長与と共にライプツッヒ大学にて医学全般を学び、医学博士の学位を得て帰国した。

帰国後は、宮内省侍医局に奉職し、明治20年には明治天皇皇女・久宮静子内親王の侍医となり、さらに大正天皇の御附医官を務めている。

（2015・5・26 京都府立医科大学HP，他）

108 河島 醇 (かわしま あつし) 1847 - 1911 鹿児島 留学生



大日本帝国憲法の父、シュタインを発掘 日本勧業銀行初代総裁

薩摩藩士・河島新五郎長寛の長男として鹿児島に生れる。幼名：新之丞。号：磐石。藩校・造士館で学ぶ。戊辰戦争に従軍。明治2年、藩選抜で昌平校に入り、さらに川田麴江塾で学び、明治3年12月大久保利通の推薦で、東伏見宮彰仁親王の英国留学に随行して渡英するが、翌年文部省留学生として、普仏戦争に勝利したドイツに変更して、その間に岩倉使節団とも交流する。明治7年(1874)3月帰国して、外務省に八等出仕で入省。次いで、一等書記生を発令され、ドイツ公使館勤務を命ぜられる。更に、露国公使館、オーストリア公使館で勤務し、ローレンツ・フォン・シュタインに学ぶ。

明治14年(1881)8月に帰国し、大蔵省権大書記官となり議案局に勤務。外務権大書記官、参事院外議官補も兼務した。

明治15年参議・伊藤博文に随行して欧州憲法調査に参画。同行者には、伊東巳代治、西園寺公望、岩倉具定、広橋賢光(以上参事院議官補)、山崎直胤(太政官大書記官)、平田東助(大蔵少書記官兼太政官書記官)、吉田正春(外務少書記官)、三好退蔵(大審院判事)等であった。最初、ドイツのグナイストに学ぶが、その態度が無礼と河島が激怒して、旧知のシュタインを推薦したと言われる。

明治17年大蔵省調査局勤務となり、大蔵大書記官、一等主税官、大蔵参事官など歴任するが、時の大蔵卿・松方正義に忌避されて、明治18年から22年までの間、欧州財政事情調査の名目で、再三欧州に出張・追いやられる。明治20年にドイツからの書簡を研究した岡崎精郎の研究『中国研究における実学的先駆—河島醇の書簡を中心にして』によれば、煙草専売の研究にあっていた河島は、「欧州の近代は恰も春秋戦国の史歴を見る如し」とした上で「日本は一回血鉄政策をとり、断然清国と戦い、速やかに勝利して、以て彼と共盟し、わが東洋将来の政策を共計しなければならぬ」と説き、「主観・ドグマに浸り切った漢学を排し、英学、ドイツ学、に加えて現実の支那学を小・中学で学ばせるべき」と言っている。薩摩の実学「我が行にせずば甲斐なし」の精神か。

明治23年(1880)退官して、同年の第一回衆議院総選挙に立候補し、藩閥政治打破と民党合同を主張して当選。その後、明治27年まで4回連続当選し、その間、自由党、第三議会、同盟倶楽部、立憲革新党などを経て、立憲自由党の幹事を務める。

明治30年(1897)日本勧業銀行初代総裁に就任。その後、滋賀県と福岡県の知事を歴任。明治36年貴族院勅選議員に任命されたが、北海道庁長官在任中に、寒さで心臓病を患い、死去した。著作に『シュタインの憲法及行政法要義』

(2015・5・27 LAWAngle「現行民法典を創った人々」他)



日本毛織物工業の父 兵学留学から殖産興業に転ず

厚狭郡（現下関市）の大庄屋・伯野瀬兵衛の次男として生まれる。幼名：竹之助。幼時、萩藩厚狭毛利家家臣・井上半右衛門の養子となる。幼時から学問・武技にぬきんでていたようだ。22歳で、四境戦争の小倉口で大いに活躍した。山口兵学校で兵学、蘭学を学ぶ。明治3年、木戸孝允に従って上京し、ドイツ公使館書記・ケンペルマンに就いてドイツ語を学んだ。半年後の明治4年、北白川宮能久親王のプロシア留学の随行で、松野礪、田坂虎之助、熊澤善庵、丹羽淳一郎、吉田平之允らであった。一行は米国、英国を経て、ベルリンに到着している。井上の目的も、北白川宮と同様に兵学であったが、日本に今必要なのは兵学より殖産興業だと思うようになり、岩倉使節団が英国に着いた時、大使らを説いて、留学目的の工業に転向を希望したが聞き入れられず、再度、使節団がベルリンを訪れた時、木戸や伊藤博文を説得してやっと認められる。それからは、ドイツ・ザガンのカール・ルウルブリヒト毛織物工場に、一職工として働き、紡績、機織、製絨、染色、仕上げの行程を隈なく学び、技術習得証明書を得て、明治8年に帰国。

明治9年内務省勸業寮に入り、殖産興業政策のもとで毛織物工場の建設を建議し、それが入れられると、機械購入や諸準備の為、再度、渡独する。明治10年、ドイツ人妻・ヘードビヒを連れて帰国し、東京官営毛織物模範工場・千住製絨所を立ち上げて、明治12年初代所長に就任する。明治14年には、内務省御用掛から農商務省の所属となり、農商務省御用掛・少技長となる。この年、長女・ハナ誕生。内国博覧会審査官にも任命されている。毛織物は、陸軍の軍服用羅紗の生産で、その後、陸軍管轄になるが、井上は「陸軍だけでなく日本の毛織物工業の亀鑑として、輸入を防ぐ」という殖産興業の原点をなすと手帳に書き残している。残念ながら、彼は工場の火災や仕事の激務もあり、肺を病み、療養中の熱海で、42歳で亡くなっている。夫人のヘードビヒと娘・ハナは明治20年ドイツに帰国した。その子孫は今もドイツに住んでいる。井上省三の銅像と碑は、千住工場跡と臨終の熱海に建てられている。

(2015・5・28 『井上省三伝』井上省三記念事業委員会編、小林富士雄著『松野礪のドイツ留学時に同行した人々』『松野礪と松野クララ』)

110 松野 礪 (まつの はざま) 1847 - 1908 山口 留学生



日本近代林学の父 妻クララは幼児教育とピアノ指導の母

長州藩美祢郡の郷士・大野徳右衛門の四男として生まれる。長じて姉の婚家先の医師・長松 幹の家に寄寓し。和漢のほか蘭学・医学を学んだ。幕末の動乱に乗じ、義兄と脱藩して京都に上る。この時から、両家の一字を取って松野姓を自ら名乗る。明治2年、22歳で単身東京に出てからは、医学のほか専心ドイツ語を学び、明治3年末に北白川宮殿下のドイツ留学に際し、蘭・独両語の学力を買われて随行する機会に恵まれる。ドイツでは当初、国費留学生として「国家経済学」を学ぶ予定であったが、産業振興の実学を学びたいと思い、駐独公使の青木周蔵に相談すると林学を薦められる。一年間は普通学を学んだ後、明治5年10月よりエーベルスワルデ高等森林専門学校に入学する。

その頃、岩倉使節団がベルリンに着き、森林学を学んでいる留学生がいると松野はベルリンに呼ばれて、木戸孝允、大久保利通に対し、森林が如何に国家経済に有用かを説いて感銘を与えている。松野は学校で、気象学、科学・物理学、植物生理学、動物学と森林学を4年間学んで終業、明治8年帰国。大久保利通を訪ねて、内務省地理寮木石課(のち山林課)に任官する。早速、官林調査仮条例を作って、各地の官林調査などに緒方道平とともに着手する。然し、現場は、藩政時代の山役人ばかりで調査も難渋し、林業技術者の養成が先決だと思い知る。更に森林・林業には内務卿の大久保利通以外に理解者は少なく、やっと、西ヶ原の樹木試験場が出来ると、その大久保が明治10年暗殺され、よりどころを失って普及啓蒙には苦勞したようだ。明治12年山林局が発足。

転機は明治14年には農商務省山林局となり、臨時の農商務卿となった西郷従道に山林学校の創設を持ちかけたところ、請け合ってくれ、明治15年農商務省東京山林学校が発足して、松野は校長に任ぜられた。山林学校はのちの学制改革で東京農林学校、次いで農科大学(東京大学農学部林学科の前身)となる。

松野は明治23年農科大学教授を辞任して行政に戻り、長野および東京の大林区署長(現在の営林局長)などを経て、明治38年山林局林業試験場の発足と共に初代場長となる。山林学協会や大日本山林会に関与している。

松野はドイツで知り合ったクララ・ジッテルマンと明治9年12月に結婚した。この結婚には木戸孝允がよく面倒を見ており、クララを東京師範学校の英語教師や師範学校付属幼稚園の主任保母として雇用。クララは幼稚園の始祖フレーベル式幼稚園教育を導入、ピアノ伴奏で唱歌を導入するなどのほか、宮内庁雅楽課を対象に、三条実美邸でピアノを教えている。いずれも日本最初の出来事である。

(2015・5・29 この記事・写真はすべてを小林富士雄氏の諸著作に負っている)

111 橋 耕齋 (たちばな こうさい) 1820 - 1885 通訳 ロシア日本語教師



幕末密航してロシアへ 日露辞典を共著で出版 帰国後隠棲

謎めいた人物である。掛川藩士の立花四郎右衛門の次男として生まれ、立花条蔵を名乗ったとも、同じ掛川藩の増田市郎兵衛に連なる増田甲齋（ロシアから帰国後はこの名を名乗った）との二説ある。大阪緒方洪庵の適塾で塾頭を務めたとの説もある。

故あって士分を捨て、脱藩して他藩からの誘いも断り、一時博徒の頭目となって、何度か投獄されるが、やがて出家して池上本門寺に入り、ここで幹部に推挙されるが固辞して雲水となり諸国を回った末に、伊豆・蓮華寺に辿りつく。「順知」の名で見習い坊主だったと言う。1854年の大地震と津波で、折しも日本を訪れていたプチャーチン率いる「ディアナ号」（500人乗組）が、大破して、その送還問題で川路聖謨が交渉にあっていた。まず、米商船「フート号」で159名を送還し、次に戸田村で新造した「戸田号」でプチャーチンら48名が、そして、プロシア船「グレタ号」で残る278名を送還された。橋耕齋は、このグレタ号に密航して乗り込みカムチャッカを目指した。当時、クリミア戦争の最中で、トルコとロシアが対立し、トルコ側英仏が加担して居て、オホーツク沖で英艦隊に拿捕され、ロシア兵と共にロンドンで捕虜生活を送る。その間に、彼の密航手助けをしたロシア使節団中国通訳のゴシケビッチ（のちに初代函館ロシア領事）と共に『和魯通言比考』（初の日露語辞典—16000語）を編纂、刊行してアカデミー賞を受賞する。ロシアに到着後、ロシア正教の洗礼を受け、ロシア名：ウラジミール・ヨシフォヴィチ・ヤマトフ（大和夫）を名乗って、ロシア外務省の役人（アジア局）に採用される。1870年にはペテルブルグ大学の日本語講師にもなっている。文久2年（1862）の竹内下野守保徳遣欧使節団がサンクトペテルブルグ訪問時には、表に出なかったが、通訳の福沢諭吉は、謁見の裏側に日本人の存在を感知している。次の慶応2年（1866）の小出大和守秀実使節団の時から、ロシア側通訳として登場している。幕府の対外姿勢の変化を感じ取って、もう密航をとがめられないと考えたものと思われる。森有礼らがロシア旅行した際も、慶応2年に幕府留学生6名が到着した時も面談している。そして岩倉使節団の訪露の際は、榎本武揚とも堂々と通訳を務めて、岩倉から帰国を薦められている。明治7年帰国後は明治政府より芝増上寺の隅に住居を与えられるが、再び仏門に入り、以降、世に出ることなく、ロシア政府の年金で暮らし、明治18年（1885）にその生涯を閉じている。ロシア婦人との間に二児を成す。

（2015・5・29 ブログGOO—伊豆便り「歴史を彩る人々」—橋耕齋・幕末の戸田港からロシアに密航した男、他）

112 佐野常民 (さの つねたみ) 1823 - 1902 佐賀 ウィーン万博副総裁, 公使



佐賀七賢人のひとり 近代国家のパイオニア 日本赤十字社初代社長

佐賀藩士下村三郎左衛門(充贄)の五男として佐賀に生れる。幼名：鱗三郎。名：栄寿、栄寿左衛門(佐賀藩主・閑叟より命名)。天保2年(1831)佐賀藩医佐野常徴の養子となる。佐賀藩校・弘道館に学び、天保8年(1837)養父のいる江戸へ遊学、古賀侗庵に学ぶ。天保10年、佐賀に戻り、弘道館で考証学、松尾塾で外科術を学ぶ。佐野家養女・駒子と結婚し、弘化3年(1846)京都で、広瀬元恭の時習堂に入門。嘉永元年(1848)大阪の緒方洪庵の適塾で学び、更に紀伊国で華岡青洲が開いた春林軒塾に入門する。適塾では大村益次郎ら明治維新で活躍する多くの人材と知遇を得る。嘉永2年、江戸で伊東玄朴の象先堂塾に入門し、塾頭となる。江戸では戸塚静海にも学んでいる。この間に勤皇運動に傾倒。藩命で帰藩し、製鍊方頭人を命ぜられる。帰藩に際し、物理・化学の中村奇輔、蘭学化学者・石黒寛次、からくり儀左衛門こと田中久重親子をスカウトしている。安政2年(1855)幕府の長崎海軍伝習所の開設に伴い、佐賀藩から、48名を引き連れ参画して、後に藩主に海軍所の設置を建言して、安政5年(1858)三重津海軍所(ユネスコ世界遺産—明治産業遺産候補)を創設し監督となる。ここで機械、金属、薬品、化成品、ガラス、写真、電信など多方面の技術開発に多大な成果を挙げている。慶応3年(1867)のパリ万博に佐賀藩代表で参加し、そこで国際赤十字社の組織と活動の実態を見聞し、更にオランダで「日進」の建造を発注し、西欧各国の軍事、産業、造船所など視察して、明治元年帰国した。明治3年、兵部少丞に就任、日本海軍の基礎作りに尽力する。翌年、工部大丞・初代灯台頭に就任、洋式燈台の建設にあたる。明治5年、博覧会御用掛に就任し、日本の産業の近代化をめざし、まず日本初の博覧会を湯島聖堂で開催、翌明治6年、ウィーン万博事務副総裁・駐澳公使兼駐伊公使として渡欧、岩倉使節団を案内している。

帰国後、明治10年の西南戦争に際し、敵味方なく負傷者を看護する「博愛社設立請願書」を政府に提出するが認められず、熊本で有栖川宮熾仁親王から博愛社設立の許可を得て、有栖川宮を総長として発足、佐野と大給恒が副総長となる。明治20年に博愛社は日本赤十字社と改称し、佐野が初代社長に就任する。この年、国際赤十字に加盟する。更に佐野は、明治12年に、日本美術の海外流出を防ぐために龍池会(のちの日本美術協会)を発足させ、終身会長を務めて芸術家の保護育成に努めた。明治13年、第五代外務卿に就任。明治15年、元老院議長(1882 - 1885)、第一次松方内閣の農商務大臣、中央衛生会会長、大日本私立衛生会会頭を歴任。博愛社病院開設をしている。

(2015・5・31『幕末維新と佐賀藩』—毛利俊彦 他)

1 1 3 川村純義 (かわむら すみよし) 1836 - 1904 鹿児島 海外視察中



日本近代海軍の創始者 皇孫 (昭和天皇、秩父宮) の御養育主任

薩摩藩士・川村興十郎の長男として鹿児島に生れる。妻・春子が篠原国幹の娘。国幹の妹・満左子は西郷隆盛の母であり、川村は隆盛に実弟のように可愛がられた。

少年時より、兵学を学び・砲術を修めた。安政2年(1855)幕府開設の長崎海軍伝習所に薩摩藩より選抜されて入所。戊辰戦争では薩摩藩四番隊長として、鳥羽・伏見の戦いから白河・会津戦争まで各地を転戦する。凱旋後、薩摩の藩主・島津忠義の面前で藩主の弟・久治を門閥排斥の先頭に立って詰問し、結果久治は憂死している。

明治2年島津忠義に従って上京、大久保利通の要請で村田新八とともに新政府に起用され、兵部大丞となり、翌年海軍掛として、以降海軍に専従することになる。明治4年兵部少輔。明治5年兵部省が廃止され、陸軍省、海軍省に分離し、勝海舟海軍卿が就任したが、主要ポストを薩摩系が握る中、海軍大輔が不在のまま、海軍少輔に任じられた川村が海軍の実質的指導者となる。開設の海軍兵学校兵学頭(校長)を兼ねる。兵学校生徒11名(東郷平八郎、伊地知弘一ら)を外国留学に送り、自身は艦隊諸港回艦に乗り組む。その頃、一度台湾征伐の議が起こり、朝議が略、討伐に決まったのを、川村の反対で取りやめになっている。明治5年から6年にかけてウィーン万博視察を命ぜられ、そこで岩倉使節団を遭遇している。明治7年の台湾出兵と大久保利通が交渉に当たった日清の不測の事態に備え、海軍大輔となった川村は大型艦三隻のイギリスへの発注や東海鎮守府の横浜設置などを推進する。明治8年明治天皇の大和・京都御幸に供奉する。更に明治10年の西南戦争にあつたては、西郷を説得しようと、高雄丸で、鹿児島に乗り込み、県令・大山綱良と掛け合うが、私学党の篠原・永山らに阻止され果たせなかった。開戦となるや、山縣有朋と共に、参軍(総司令官)として海軍を率い、海上からの砲撃で、熊本城包囲を解かせる一因を作った。明治11年(1878)参議兼第二代海軍卿となり、一時、伊藤博文、山縣有朋の切り崩しで、榎本武揚に譲ったが、薩摩系軍人の榎本忌避もあり、明治18年まで海軍卿を務めて、同年明治天皇の要請で宮中顧問官に転じて、皇孫の御養育主任として、昭和天皇や秩父宮の養育にあたった。明治24年には、明治天皇は狸穴町のジョサイア・コンドル設計の川村邸を行幸して、水雷技術と能楽を見ている。死後、海軍大将に昇格している。枢密顧問官。明治16年、隅田川で海軍のボート・レースを開催している。伯爵。従一位旭日桐花大授章。外孫に白洲正子。

(2015・5・31 さざれ石ブログ。国会の川村年表 等)

—外国であつた日本人編おわり—